

## 館蔵資料紹介 No.6 (特別寄稿)

## 岐阜大学訪書ノート

松田清

## 医学部分館の和漢医書

平成五年五月某日、京都で久しぶりに再会した梶山雅史氏はうれしそうに鞆から封筒を取り出した。岐阜大学附属図書館の医学部分館に江戸時代の医書が沢山あることが判明したとのことであり、封筒の中身はその書名リストであった。「これは大したものです。いちど調査させて下さい。」酔眼に映った書名だけから、先のことも考えず、つい叫んでしまった。これほどの蔵書は一体誰のものか、何としても知りたかったのだ。やはり、その後なかなか機会を得ず、実際訪書出来たのは夏の日だけであった。手帳を見ると、西尾市立図書館の岩瀬文庫で京都の山本読書室旧蔵本を調査した翌日の七月二十九日である。当日は岩瀬文庫で一緒だった遠藤正治先生(現在華陽高校)もお誘いした。昨秋、予期せず本誌への寄稿依頼を受けたが、より詳しく書誌調査を、と思いつつ、とうとうそのまま今に至ってしまった。当時の訪書ノートにより責めをふさぐことにしたい。

調査の結果、医学部分館所蔵の医学関係の和漢籍は主として、(1)高山の柚原家旧蔵書、(2)美濃兼山の藤掛家旧蔵書、(3)羽島の柴田寿太郎筆写講義、からなること、いずれも幕末明治期の岐阜県医学史資料として貴重であり、今後さらに研究を深める価値のあることが判明した。故青木一郎氏の調査によると、柚原家の医者としては明和七年(1770)五月記載の「飛騨国書集並医名寄」に柚原三省、柚原理庵、天保十五年(1844)、御役人出入医師の月番制を記した記録に、柚原梅春の名がみえる。明治七年に開院した公立高山病院に柚原姓の医員がみられる。明治九年作成の医師名簿(岐阜県立図書館蔵)には柚原格蔵の名が挙がっており、歳三十五、漢洋を兼ね、元治元年正月開業、高山町在住、「安政六年七月ヨリ六ヶ月間、西京大村泰輔」のもとで修業したという。

## 柚原家旧蔵書

蔵書印、署名、筆跡、帙の状態などにより旧蔵書と判明のみを掲げる。

- 1 重訂解体新書 刊
- 2 医範提綱 弘化二再刻 刊
- 3 医学通論 刊
- 4 薬品手引草 刊
- 5 濟世三方 嘉永二 杉田成卿 三冊 写

- 6 続内科則 チツソツト 新宮涼庭 四冊 写
- 7 布斂己徽毒論 (プレッキばいどくろん) 上中下三冊 写
- 8 名医方考
- 9 医方聚要
- 10 瘍科方笈 写
- 11 古方便覧
- 12 温疫論私評 南豊秋吉先生著 快雪堂蔵板 乾坤
- 13 痘疹秘録 安永九 和刻「柚原一清」印
- 14 麻疹精要方 橘尚賢 明和九 刊「梅春」印
- 15 傷寒訳通 「一清」墨書
- 16 驅豎先生灌腸則 新宮涼庭訳述 導尿則 新宮涼庭訳 古列亜設爾巴斯(コレアモルヒユス)説 勃微爾(ホウイール)著 宇田川榕菴訳 文政五 訳者識 写 冷徹疫症候并治方 南豊秋吉先生口授 写 腋診録 南豊秋吉先生 写
- 17 快雪堂傷寒論抜粹 写
- 18 快雪堂方府 写
- 19 快雪堂丸散膏方 写
- 20 妙薬博物笈 藤井見隆 纂輯 文政六
- 21 婦人良方大全 二十四卷八冊 宋・陳自明 寛永十三和刻 卷二十四末尾に「柚原氏」「義隆」の墨書および「柚」印
- 22 快雪堂方劑録抜粹 卷中下 二冊 写 「柚」印
- 23 蕪菱南鍼 写
- 24 医方小乗 写 三冊 和田純 「柚原」印
- 25 南鍼示蒙 写
- 26 遠西二十四方 坪井信道編輯 天保二序 「柚」印
- 27 潭思堂方府 写
- 28 知止齋煉膏一覽 藍涯先生閱 男大村恭謙卿 撰輯 写
- 29 春林軒膏方一覽 写
- 30 初学人身窮理 松山棟菴、森下岩楠 合訳 明治九再刻 「柚」印、墨書「柚原氏」
- 31 医家必読 明・李中梓 貞亨四和刻 十冊「柚原」印
- 32 類経図翼 八卷七冊 類経附翼 四卷二冊「柚原」印
- 33 遠西医方名物考 同補遺 「柚原」印
- 34 類経 「柚原」印



35 陶節庵家蔵傷寒六書 「柚原」印

藤掛家旧蔵書

- 1 物理階梯 片山淳吉纂輯 壬申初冬 文部省 愛知県下学校用翻刻 「美濃藤掛氏記」「藤掛蔵書 みの兼山」印
- 2 診法要略 佐々木師興 青黎閣発兌 江都須原屋伊八 上中二冊 下欠 「藤掛蔵書 みの兼山」印
- 3 公益本草大成 (題籤・和語本草綱目) 岡本為竹 (一抱子) 元禄十一刊 洛陽小佐治半右衛門 「藤掛蔵書 みの兼山」印
- 4 薬物学 (角書・日講紀聞) 明治六序 大阪府病院刊 「美濃藤掛氏記」「藤掛蔵書 みの兼山」印

柴田寿太郎筆写講義録

京都府医学校時代 (明治二十五年頃) の講義録と思われる。

(他に未調査分あり)

- 1 診断学
- 2 精神病学
- 3 処方学 鈴木幸三郎・印東玄得 合著
- 4 骨筋韧带篇
- 5 薬物学 小倉閔治 講述
- 6 外科通論
- 7 外科各論

附属図書館にて

医学部分館のあと、附属図書館本館へ移動した。まず特別資料庫の集密書架に案内してもらい、一冊一冊丁寧に挿入された真新しい防虫紙に館員の苦勞をしのびながら、和漢籍の蔵書印を調べた。短時間ながら、『群書類従』に「立教館図書印」「桑名文庫」「白河文庫」印、『平津館叢書』に「阿波国文庫」印、『資治通鑑』に「野村藩蔵書印」を見出すことができた。立教館は桑名藩の藩校であり、白河藩松平家の蔵書印「白河文庫」は松平定信の子定永が文政六年 (1823) 奥州白河から桑名に入封したことによるのであろう。「阿波国文庫」は阿波蜂須賀家の蔵書である。野村藩は大垣新田藩が明治二年五月に改名したもので、明治四年七月に野村県となり、同年十一月岐阜県に編入された。ここでの収穫は蔵書印の他に、以前から一度手にしたいと思っていた川上広樹著『足利学校事蹟考』(細川十洲序、明治十三年刊)にめぐり会えたことである。大垣の江馬元齡 (活堂) が著した啓蒙書『人身問答』(明治八年刊) もうれしかった。

訪書の楽しみは、未整理本のなかから思いがけない発見をすることである。未整理本を尋ねると、岐阜高等農

林学校および岐阜師範学校旧蔵の教科書類が集密書庫に一括収納されているという。薄暗い書架に輝いて見えたのは J.S. Mill, *Dissertations and Discussions*. London, 1867. の美本で、岐阜高等農林旧蔵書の質の高さを物語っていた。

岐阜師範学校旧蔵書のなかに装丁から一見してフランス書と分かるものがあるので不思議に思い、手にとって開いてみると、「大垣文庫」の蔵書印をもつブレーズ『英国史』第四版 Belze, G., *Histoire d'Angleterre*. Paris, 1869. ではないか。ブレーズの著した教科書叢書『初等教育教程』の一冊で、このシリーズは明治初期に各地の藩校で購入されたものである。これまで高知藩旧蔵の『英国史』『理化学』(高知県立追手前高校蔵)、福井藩旧蔵の『理化学』(福井市立図書館蔵) が管見に入っている。大垣藩もやはりそうか。同じ「大垣文庫」印を有する蘭和辞典「ドーフ・ハルマ」を大垣市立図書館で見っていたので、幕末の先進藩における蘭学から仏学への流れをここでも確認できた。この大垣本は表紙に「佛書ベリーズ 英国史」と墨書した貼紙がある。赤通しが多数見られ、特にマグナカルタやノルマンコンケストの部分はよく読まれている。acquiescement, abreuvé など中級レベルの単語に赤通しが付けられているところから、読者は比較的高度なフランス語読解力を身に付けていたと思われる。同じ「大垣文庫」印のあるゴサン『理科入門』Gossin, H., *Cours élémentaire de physique*. Paris, 1867. さらに「野村藩蔵書印」をもつノエル, シャプサル共編『新フランス語辞典』第二版 Noël et Chapsal, *Nouveau dictionnaire de la langue française*. Paris, 1868. も出てきた。後者はブレーズの教科書とならんで各地でよく見かける辞典である。前者の口絵に見られるスペクトログラムの見事なカラー印刷はこの洋書を手にした明治初期の日本人に、ヨーロッパの高度な印刷技術を認識させたにちがいない。

整理済みの岩田文庫では瑪得瑪第加 (マテマチカ) 塾蔵版『探蹟算法』(剣持章行著、阿波藩士小出脩喜序、天保十一年刊) が印象深かった。瑪得瑪第加塾は幕末明治初期に活躍した和算家で西洋数学を導入した内田五観の数学塾であり、小出脩喜 (長十郎) は幕府天文方でランダ天文書の翻訳に参画した蘭学者である。

わずか一日の訪書であったが、梶山館長と本好きの図書館員のおかげで痛快な消夏の日を過ごすことができ、良き思い出となっている。

(まつだ きよし: 京都大学総合人間学部教授)  
(各図書配置場所: 特別資料・フィルム庫)